



変化する就職環境

キャリア委員長 林 良雄

皆さんにとって就職とは何でしょうか。単なる生活費を稼ぐための手段、と考えている方もいらっしゃると思います。勿論就職とは生きるために必要な収入を得ることも大きな要素です。しかし、それだけでは、働き続けるというモチベーションにはならないようです。仕事を通して周りから認められ、組織の中で自分がちゃんと位置づけられ、最終的には自分がこうなりたいという自己実現をしていくことが働く目的だといわれています。

皆さんも、大学に入るときには卒業したらこんな職業に就きたいと考えていたのではないのでしょうか。あるいは大学で学ぶ中で就きたい職業が見つかることもあるでしょう。その職業で自分が輝くことができると思えるのではないのでしょうか。ただ、残念ながら、その職業の適性というものが、それにあった人を選ばなければ、雇う方、雇われる方両者とも不幸になるので選抜があります。その選抜に臨むのが就職活動です。

近年その入り口が大きく変化しつつあります。例えば教員採用試験の早期実施や地方公務員採用試験でSPIを取り入れ、面接や論文に重点を置くなどです。一般企業では更に大きく変わろうとしています。就職活動の時期が早まりつつあり、インターンシップでの活動評価が採用でも使うことができるようになります。また、社会の全体の流れもAI技術の進歩が大きな影響を及ぼしつつあります。

今就職に何が求められつつあるか。知識ではAIに勝てません。AIには（まだ？）ないコミュニケーション力や粘り強さ、マネジメント力などの人間力がこれまで以上に求められます。そのような力は、自分で目標を設定して人と関わりながら目標に向かって全力で努力することで得られるので、普段の勉学や部活などが重要です。

しかし、力はいっても就職活動にはいると初めてのことが多く、あれこれ分からないことがたくさん出てきます。これを支えるのが大学の学生・就職課や学部のキャリア委員会です。そして、何より親身になって一緒に考えてくれるのが本学部

にある就職情報室です。是非とも我々の支援を有効に活用して、輝く未来の自分を目指してください。

＜就職情報室からのメッセージ＞

就職情報室では学年問わず就職支援を行っています。教員・公務員・企業志望の方は勿論、未定の方もお気軽にお立ち寄り下さい。

学生の皆様にお伝えしたいことは、将来の選択肢を広げるために社会にはどんな職業があるか知ること、目的意識を強めて学生生活を送ることです。学生時代頑張ったことに何を書けば良いかわからない、との声を多く聞きますが、採用担当者が知りたいのはあなたの物事の考え方です。一人ではわからない事が多いと思いますので、就職情報室等本学の就職支援をご活用下さい。

ノーベル化学賞受賞者吉野彰氏は「勉強の苦しみは一瞬であるが、勉強しなかった後悔は一生続く」と仰っています。皆さんも勉学に励みつつ、時には息抜きをして学生生活を送って下さい。



教育文化学部学生協議会について

学生協議会議長 和泉 浩

教育文化学部には「学生協議会」という教員と学生・大学院生で構成される組織があります。学生と院生は各コースから委員が1名から数名選ばれています（地域文化学科の1年生はまだコースに分かれていないため学科から選ばれています。知らない方もいると思いますが、地域文化学科は2年生からコースに分かれます）。委員の任期は少し中途半端な感じもありますが、11月から翌年の10月までの1年間になっています。学生委員のなかから学生代表と副代表が選ばれます。

この学生協議会は、教育文化学部の「生徒会」のような組織ですが、残念ながら学生や教員の間でもあまり知られていません。仕事内容としては、①学生の大学・大学院生活の充実に関すること、②学生の教育及び環境の改善に関すること、③学生のボランティアに関すること、④学生からの情報発信に関すること、⑤その他学生の教育に関する重要事項、を協議する、と「教育文化学部学生協議会要項」というこの協議会について定めた要項のなかに書かれています。実際の活動としては、学部長との懇談会とオープンキャンパスでの準備・受付くらいしか行われておらず、コースから選ばれるときに「ほとんど仕事がないから」と言われて依頼されることもあるようです。

まだ取り組めていないのですが、こうした学生協議会の活動状況を少し変えていきたいと考えています。この

組織は「大学・大学院生活の充実」を考え、そのために活動する組織です。学生のみなさんのそれぞれの感じ方は違うと思いますが、私は秋田大学教育文化学部がとってもいい学部だと思っています。そして、教育文化学部と大学院のみなさんの一人でも多く方が、教育文化学部に少しでも愛着を持ち、卒業・修了するときに「秋田大学教育文化学部でよかった!」と感じてもらえるようにしたいと

↓学年は2023年度のもの

教育文化学部 学生協議会				
代 表	有原 香乃	アリハラ カノ	心理実践コース	4 年
副代表	田口 陽介	タグチ ヨウスケ	特別支援教育コース	4 年
副代表	相馬 慈	ソウマ イツム	教育実践コース	3 年
副代表	藤田 菜々子	フジタ ナナコ	国際文化コース	3 年
委 員	工藤 凱	クドウ カイ	教育実践コース	2 年
	佐々木 萌	ササキ モエ	英語教育コース	2 年
	中野 大誠	ナカノ タイセイ	理数教育コース	2 年
	田口 龍大	タグチ リュウダイ	特別支援教育コース	2 年
	小館 孝之介	コダチ コウノスケ	こども発達コース	2 年
	齋藤 涼夜	サイトウ スズヨ	地域文化学科	2 年
	井出 愛弓	イデ アユミ	地域文化学科	2 年
	長谷部 ひなた	ハセベ ヒナタ	英語教育コース	3 年
	伊藤 彩花	イトウ アヤカ	理数教育コース	3 年
	藤原 宙詩	フジワラ チュウタ	特別支援教育コース	3 年
	青山 菜月	アオヤマ ナツキ	こども発達コース	3 年
	沼倉 大真	ヌマクラ ダイシン	地域文化学科	3 年
	野口田 萌子	ノロタ モエコ	心理実践コース	3 年
	柴田 光友	シバタ ミツトモ	教育実践コース	4 年
	近藤 聖真	コンドウ セイマ	英語教育コース	4 年
	山崎 天誠	ヤマザキ テンセイ	理数教育コース	4 年
	奥寺 ひより	オクデラ ヒヨリ	こども発達コース	4 年
	福士 藍	フクシ ラン	地域社会コース	4 年
	大島 未来	オオシマ ミク	国際文化コース	4 年
	田口 桜子	タグチ サクラコ	国際文化コース	4 年
教 員	和泉 浩	学生協議会担当		
	石井 照久	教務学生委員長		
	成田 雅樹	学務委員長		
	大橋 純一	副学部長・広報委員長		
職 員	丸山 貴生	学務担当主査		

思っています。学生協議会の活動によって、学生のみなさんの学部への愛着や学部の楽しさをほんの少しでも高めることができればと考えています。

そのために、今年度の協議会の委員のみなさんに活動のアイデアを募集しました。いろいろとおもしろそうなアイデアがあったので、来年度から少しずつ実施していくことを考えています。いつか学生主体で動いていく、まさに学部の「生徒会」のような組織になってくれることを期待しているのですが、高校と大学では学生のつながり方も交友関係も活動範囲も関心も、かなり違いますので、高校と同じようにはいかないとはずですし、その点も難しいところです。委員ではなくても、協議会の活動に少し関心を持ったり、何かアイデアを思いついた方はぜひ連絡してください。もしこれを読んでくださっている高校生のみなさんは、教育文化学部に入學したら、この活動にかかわることも考えてみてください。学生がかかわりたいと思えるような組織になることが目標です。



2019 年度のオープンキャンパスでの活躍



2018 年度のオープン
キャンパスでの活躍



【学生委員代表挨拶】

心理実践コース 3 年次 有原香乃

みなさんこんにちは。この度、学生協議会の代表を務めさせていただくことになりました。学生の方々はもちろん、先生方のお役に立てるように頑張ります。

学生の方々はもちろん痛感していたかと思いますが、私たちが 1、2 年の頃は新型コロナウイルスの影響で、対人交流の機会が中々得られませんでした。家で一人でパソコンと睨み合いながら授業を受け、ズームから退出する。すると一気に部屋が静寂になる。あのなんとも言えない不可思議な体験は、なかなか忘れられそうにないでしょう。コロナウイルスがある程度落ち着いた 3 年生になってから、対面授業や実習、サークル活動に参加できるようになりました。友達と授業を受けて、そのあとは遊んだりサークルに出たりする。

ここ 1 年でやっと「大学生生活」が始まったような気がしていますが、あと約 1 年で卒業なのです。まだまだやりたいこと、やり残したことがたくさんあります。おそらく私と同じ学年である 3 年生であれば共感していただけるかと思います。もちろん 1、2 年生にも、大学生だからこそやりたいことはたくさんあると思います。そこで学生協議会の代表として、微力ながらみなさんのお手伝いがしたいのです。学生から意見や要望を聞いて、それを元に学生協議会で話し合い、改善策を出していく…きっと、高校までの学校生活とも、社会人になってからの仕事とも、少し異なった自由度の高い活動と言えるのではないのでしょうか。これこそ、大学生らしい活動と言えると私は思います。

せっかく原稿を書かせていただく機会を頂いたので、最後に私からひとつメッセージを残したいと思います。それは「自分と付き合うこと」です。付き合うとは、自分の信念及び欲求を実現することです。私はこうなりたい、こういうことをしたい、と思ったら、満足するまでとことん行動すること。上手くいけば理想の自分に近づきます。失敗したって所詮大学生ですから、1 週間経てば忘れちゃうんじゃないでしょうか。ここまで読んで

みて、ある程度の方々はお気づきだと思いますが、私はかなりの変人で何でも行動してしまう者です。自覚しています。こんな変人が代表でいいのかと私自身思っているのですが、学生協議会での活動は私のやりたいことでもあるので、とことん向き合うことができる自信があります。みなさん何卒よろしくお願いします。

【学生委員副代表挨拶】

教育実践コース2年次 相馬 慈

みなさん、こんにちは。今年度、学生協議会の学生委員副代表を務めさせていただきます。1年次から活動していますので、2期目となります。来年度は、コロナ禍で停滞していた取り組みを活発化させ、アクティブに活動していければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

昨年度は、7月のオープンキャンパスにおける活動が中心でした。オープンキャンパスでは、高校生に対する大学構内の案内や受付業務にあたりました。微力ながら、高校生に対して、本学部の魅力を伝えることができたのではないかと考えています。次年度は、学生委員による独自の企画の実施などを通して、魅力あるオープンキャンパスの実現に貢献していきたいと思います。

さて、学生協議会学生委員には、①学部・研究科の広報活動への協力、②独自のイベントの企画・実施、③学生の要望の集約、④既存の学科・課程を超えた学生のまとまりの創出、等の任務があります。コロナ禍においては、『みなおと』への寄稿や学部長との懇談会を通し、広報活動や学生の要望の集約に関して、精力的に活動してきました。今後は、「④既存の学科・課程を超えた学生のまとまりの創出」に焦点を当てて、活動していきたいと考えています。

ご存じのように、本学部は、学校教育課程と地域文化学科から成り立っています。両者は、これまで同じ学部でありながら、交流・協働の場は限定的であったと考えます。今後は、研究室やゼミ単位での交流を促進し、教員養成課程の学生の視点と、地域文化学科における学際的な学びからの視座を組み合わせ、新しい価値を創出できるような体制づくりを促進し、学部全体の活性化につなげていけたらと思います。

最後になりますが、学生生活に関して、不安や要望等がありましたら、お気軽に教3-248までお越しいただければと思います。



2018年度の学部長との懇談会

国際文化コース3年次 藤田菜々子

今期の学生委員副代表を務めます。私は、学生の皆さんがすてきな大学生活を送れるようにお手伝いしたいと思い、学生協議会に参加させていただきました。

私が大学へ入って一番実感したことは、学ぶことが楽しいということです。大学の授業の幅はとても広く、突き詰めていくなればそれが専攻になります。既知のことでも見方が変われば「興味深い、もっと知りたい」と知的好奇心を感化させるような経験ができます。

また、学びは授業だけにあるわけではありません。私の経験では、アルバイトやインターンシップ、そして何より大切にしてきた友人や先生方と話すことが、常に私に気づきと成長を促してくれます。自分の能力を高めること、これは自分との戦いと言えるかもしれません。

しかし私はこれ以上に、「他者の境遇や考え方を知ること」、「周りの人たちと共に物事を進めていくこと」が重要だと考えます。物事は多くの人たちの支えで成り立っています。だから、まずは自分のことを相手に知ってもらい、相手を頼ること、これが何かをする上で必要だと私は思います。この力は、今だけに活かされるものではなく、社会人として働くときにも役に立つと考えています。

この学びを得た私は、実践として、学生の皆さんの生活のお手伝いをしたいと思っています。授業のこと、生活のこと、将来のこと、人間関係のこと、悩みの種類は様々でしょう。

解決するのは皆さん自身ですが、その支えに私はなりたいです。一緒に悩み考え、ときには共に活動する、これが私の思う学生代表の理想像です。私が皆さんに与えるのではなく、皆さんと一緒に成長して、目標に向かっていきたいです。

何か相談したいこと、ただ聞いてほしいことなどあれば、いつでも私がその相手になります。私とぜひお話ししましょう！これからよろしくお願いいたします。



大学生活を振り返って：卒業生からのメッセージ

大学生活を通して

心理実践コース 4 年次 佐藤翔太



4 年間の大学生活を通して私が一番実感したことは、他者に頼ることの重要性です。

大学生活の後半に差し掛かると就職活動や卒業研究などの様々な難関が待ち受けていますが、その全てに共通して言えるの

は「一人で乗り越えられるものではない」ということです。私は大学生になり一人暮らしを始めて、家事を一人でこなせるようになったことで少々鼻を高くしていましたが、そうした「自立」とは別で自分だけの力ではどうにもならない様々な出来事を体験し、人と人とのつながりを実感しました。悩みや困難の身近な相談相手である家族・友人・教員以外にも、例えば就職活動では広告企業（マイナビなど）や大学の就職支援室がサポート体制を整えてくれています。また、卒業研究で調査や実験を行う場合は、参加してくれる人がいなければ研究になりません。試験勉強や面接練習を重ね企業の採用試験に臨むのも、研究を行って論文を書くのも自分自身ですが、意識していないだけでそこに至るまでには多くの人の手を借りているということを改めて感じました。より身近な例を挙げれば、自販機にジュースを補充してくれる人がいないと自販機が使えないのと同じことのように思います。

もちろん自分にできることを増やすことは色々役に立ちますが、それ以上に頼れる相手を見つけることが大学生活、ひいては社会生活を営む上で重要になると感じました。そしてそのために必要なのは、まず自分が誰かを助けようとするということではないかと思います。因果応報という言葉は「悪いことをすればそれが自分に返ってくる」という意味の方が注目されがちですが、「良いことをすればそれが自分に返ってくる」という意味もあります。押し売るほどの勢いはなくても良いので、ほんの少しの優しさを持って日々過ごしていくことが大切であるということ、大学生活を通じて考えることができました。後から何か良いことがあった時に、「自分の善意が返ってきた」と思えると、より嬉しく誇らしい気分にもなれるはずですよ。

地域文化学科で学んだこと

地域社会コース 4 年次 黒丸 建

私は地域文化学科に所属し、4 年間を過ごしました。その中で特に印象的だった 2 つのグループワークの講義を紹介します。

1 つ目は、1 年生で受講した地域学基礎です。地域文化学科の学生が、それぞれの教授が設定したテーマの中から希望した講座を選び、5～10 人でグループワークを行う講義でした。私は高村竜平先生の元で、秋田市通町の歴史や町おこしにおける課題を調査しました。この講義では、地域研究の方法について実践を通して学ぶことが出来ました。新聞を遡って行ったドキュメント分析、実際に足を運んで町おこしのイベントに参加、通町商店街の方へのインタビュー調査等、様々な方法を体験しました。

2 つ目は、3 年生で受講した特定地域研究ゼミです。これも地域学基礎と同じくグループワークの講義で、今度は中尾信一先生の元で、ニューヨークという都市の特性について調査しました。特定の地域にスポットして調査をするという点では同じでしたが、実際に行って調査することは出来なかったもので、ドキュメント分析が中心の内容になりました。論文や書籍を読み、内容を整理・分析する能力を身に付けることが出来たと思います。

3 つ目は、3 年生で受講した社会学演習Ⅲです。社会学に関連する文献を読み、その内容を報告する講義でした。私は、この講義を担当されていた石沢先生のゼミを卒業研究のゼミに選んでいます。この 3 つの講義が印象に残っているのは、卒業研究のテーマ設定に繋がったからです。私は石沢先生の元で卒業研究を行い、秋田県大館市のまちづくりに関する研究をしました。入学した初めの頃は、まだはっきりと学んでみたいことが私はありませんでしたが、この 3 つの講義を通して、社会学と地域研究という研究してみたいことを見つけることが出来ました。私のように大学や学科を選んだことに、積極的な理由が無い人も少なからずいると思います。しかし大学生活の中で講義やワークを通して、きっと関心を惹かれるテーマを見つけられると思います。



一番いけないのは、お腹がすいていることと、1人でいること

特別支援教育コース4年次 佐々木隆志

こんにちは、あるいは、こんばんは。学生協議会の一員として、「みなおと」に寄稿するべく筆を執らせていただきました。



さて、私は3月で卒業します。進路は教員でも、公務員、企業でも大学院への進学でもありません。私は大学編入という進路をとりました（？と思ったらgoogle先生に聞いてみましょう。）。このように私はかなりマイナーな進路を選択したわけですが、その理由は私的なものが大部分を占めるためここでは語りません。しかし、マイナーな選択をするということは勇気がいります。なぜなら、孤独になってしまう可能性が高いからです。私も実際にそうでした。また、もともとコロナ禍ということもあって人間と関わる機会が減少し、私は俗世との繋がりを断ちがちでした。

しかし、そんな私を救ってくれたのは友人や後輩、コースでのイベントに参加することでした。演芸祭やクリスマス会、雪合戦そして、以前とまではいきませんがささやかな歓送会も行うことができました。研究室での友人や後輩との何気ないおしゃべりやイベントを通して自分の中の孤独感というものが薄れていき、自分の弱さを少し認めることができたり自分を縛ってしまっていた価値観を解くことができたりしました。友人や後輩たちには感謝の気持ちでいっぱいです。

後輩のみなさん。これからは答えのない問いに挑戦し自分なりの答えを導き出すことや、受動的ではなく能動的に探さることが必要になります。しかし、これらのことは出来なかったから意味がないということではありません。強くあらねばならない、弱くあってはいけない、ということでもあ



りません。失敗しても挫折してもいいのです。そこから前を向ければ良いのです。難しかったら横を向いてください。きっと友人たちがいます。一番いけないのはお腹がすいていることと、1人でいることです。お腹がすいたらお腹いっぱい食べましょう。1人でいることにツラさを感じたら外に出ましょう。すこしばかりよい一日になるはずです。また、そんなお友達がいたら手を差し伸べられるといいですね。後輩諸君の明るい明日を願っています。では、また。

秋田大学での学びと出合いを振り返って

国際文化コース4年次 須藤 奏

もうじき秋田大学での4年間の学びも終わりを迎えようとしています。今振り返ると、友人との出合いや、学習を通じた交流はもちろん、2年次からの新型コロナウイルス感染拡大後のリモート学習体制など、私たちの年代でしか体験出来なかった、貴重な経験を多くしたと感じています。

特に4年次では、就職活動と卒業論文の執筆が特に印象に残っています。私は公務員志望だったため、春季休業の間は毎日スケジュールを組んで試験勉強をしていました。他の民間志望の友人は既に内定をもらっていたり、就職に必要な試験を受けていたりしていたので、多少うらやましさを感じることもありましたが、自分は自分だと気を引き締め、勉強をつづけました。そして、希望する官庁に無事に合格を頂くことができました。共に励ましあった友人や、家族、キャリアステーションの方々、そして就職試験に理解を示し、励ましの言葉をかけてくださった先生方には感謝してもしきれません。

卒業研究は、中村寿先生のゼミで、オーストラリアの劇作家であるグリルパルツァーの書いた短編小説をテーマに行いました。日本ではなかなか知られていない人物のため、資料が少なく苦労した点もありました。しかし、研究の中で原文を自分で読み、翻訳してみたことを通じて、作者の作品執筆の意図や、作品内の描写を、自分なりの考えを持って研究することができたと思います。まだやれることがあったようにも感じますが、当初取り組んでみたいと考えていたテーマについては一通り研究することができたので、満足しています。

こうした出来事や研究の経験は、この秋田大学でしかできず、得られなかったものだと思います。4年間の在学中にあったどんな出来事も、振り返れば良い思い出となっています。卒業後もこうした経験を忘れず、時には友人と語り合って学生時代を思い出して、今後の励みにしていければと思います。

特別支援教育での防災学習教材の研究

こども発達コース 4 年次 伊藤鮎子

私は、卒業研究として、「秋田市版クロスロードを活用した防災教育教材の開発ー特別支援学校での授業実践を通してー」というテーマで 1 年間の研究を進めました。近年、自然災害の頻発やそれによる被害の状況等により、自分の身を守るための防災教育が重要視されてきています。加えて、防災教育を考える上で、特別支援学校における防災教育カリキュラムが十分に構築されていない現状から、障害のある子どもたちも防災を我が事として考え、災害時に生きる防災を学ぶことが求められています。こうしたことから、防災教育教材の一つであるクロスロードゲームを用いた、特別支援学校における新たな防災学習の方法を探りたいと思ったため、このテーマを設定しました。



本研究を進める中で大変だったのは、作成したゲームの実践と、アンケート結果の分析です。今回は、秋田大学附属特別支援学校にご協力いただき、作成したクロスロードゲームを 2 回実践し、ゲームに参加した子どもたちのアンケート結果を分析する形で研究を行いました。

子どもたちがゲームに関心をもって取り組みやすいように、通常のクロスロードゲームにはないオリジナルのカードを導入したり、ルールを変更したりして、楽しみながら防災を学ぶことができるという点を意識して行いました。また、ゲームを行った子どもたちの性格・障害特性やアンケート結果から、クロスロードゲームが子どもたちに与える影響を総合的に分析しました。それぞれで全く異なる特性を持つ子どもたちのアンケート結果は非常に様々で、なぜそのような結果になったのかを一人ずつ考えていくのは、とても大変でしたが、この研究の中で最もやりがいを感じた部分でありました。

1 年を通してこの研究を行ってみて、以前よりも身についたと感じるのは、物事を多角的に見る力です。今回の研究では、実践したクロスロードゲームの子どもたちに対する影響を明らかにした上で、このゲーム教材をより効果的に活用していくための方法や、今後の展望にまで内容を広げました。こうした点についても考えたり、時間をかけて分析内容を考察したりすることで、物事を色々な視点から考えることができたのではないかと思います。学科の勉強や就職活動等と並行して、1 年間にわたり研究を行うのは大変でした

が、4 年間の学びや自分の関心ごとを追及することができた、とても充実感に満ちた研究であったと思います。



編入生としての秋田大学

英語教育コース 4 年次 佐藤直哉

私が秋田に越して来たのは 2018 年の春ですが、当時私は秋田大学ではなく、他大学の学生でした。その大学で選択できた教職課程を学ぶなかで、公教育に携わることに魅力を感じ、それまでの分野を離れ教育について専門的に学ぶ覚悟を決め、編入試験を受けて二年次で入学しました。

私が入学して一番感じたことは、そこにいる人々の多様性です。以前の大学は、一定の方向性をもって情熱的に特定の何かに打ち込む人々の集まりでしたが、秋田大学の学生は様々な価値観や気質をもった人々の集まりで、大学で出会う人のタイプの幅の広さにとっても驚いたことを覚えています。自分とは違う何かをもった同年代の学生と講義や実習に取り組むなかで、自分の能力だけでなく、自分自身がどういう人間なのかの再発見も多く経験することができ、貴重な学びを得ることができました。

また、教育に携わることを真剣に考える人にとっては、教育文化学部で実際に子どもたちや現職の先生方と継続的に関われる機会を作れることも大きな利点ではないかと思います。私は英語教育コースに所属していますが、秋田英語英文学会という秋田県内の現役の先生方や ALT の方々と定期的に将来の英語教育について考える場に参加することができます。更に、県内の学校で実際に非常勤職員として子どもたちと触れ合う機会を得ることもできます。教育文化学部では教育実習などをはじめ、多くの実習に参加することで教員免許を取る前に子どもたちや実際に教育に携わる人々に関わることは多くありますが、それらの実習で得た学びを継続的に活かす上では、秋田大学は有利な環境ではないかと思っています。

私は 2 つの大学で学んだ経験から、学生本人がどんな将来像をもっているかが良い大学生活を送れるかどうかの鍵ではないかと思いますが、教育に本気で関わりたい、そのために深い学びをしたいと考えている人にとって、秋田大学はその期待に十分応えられる場所ですので、そのような思いがあれば、一度ここで学ぶことを考えてみてください。

大学での生活を紹介します

私が感じた授業と生活の繋がり

国際文化コース 2 年次 杉山夏泉

こんにちは！今回、「みなおと」に寄稿させていただくことになりました。

ほとんどの授業が対面になって 1 年以上経ちました。大変になったこと、嬉しいこと両方ありますが、私個人的には学校の教室で多数の生徒と先生と同じ空間にいられることは楽しいことだと感じています。そのため今回は、大学での授業と大学生活で感じていることを書かせていただきます。

まず一番の違いは、友達が増え相談が可能になったり、より話しやすい環境になったりしたことです。しかし、登下校時間が追加されたことにより以前よりも自分の時間を取ることが難しくなりました。リモートの時は家にいたため友達ができづらかったですが、勉強時間が取りやすいため宿題はすぐに終わっていました。私が履修している授業は文学系が多く、事前課題と事後課題と分量が多めのレポートが期末に出されることが多いです。そのため、最後になって授業内容を思い返すのではなく常に集中して毎回の授業を受けた方が自分のためになると思います。毎回ただ受けるだけでなく自分の中で今日の授業では何に関心があったな、あの部分は面白かったなどの振り返りが重要だと感じます。一回毎に振り返る作業を行うことでその授業に対する意欲も湧きますし、自分の新たな関心の発見にもつながると思います。実際、文学を学ぶことで普段の生活を考え直すきっかけになったり社会で起きている問題についてその背景を知ること、ニュースで知るとような内容だけでなくより深い根に近い部分から理解ができるようになったり、面白い生活に変化したように感じています。

日々関心を何かしら抱かせる！これを続けることで自分の興味が明確になってきたり広がったりするので、来年度も関心で満たしていきたいなと思っています。



角館祭りのやま行事で留学生と

社会科教育研究室での学び

「社会科巡検」と「授業づくり演習」

教育実践コース 2 年次 相馬 慈

こんにちは。今回は、私が所属する社会科教育研究室の「社会科巡検」・「授業づくり演習」という特色ある講義をご紹介します。社会科巡検は、研究室に所属する 2 年生が履修する講義で、秋田県内を中心に、社会科教育に関する地域調査や見学を行います。事前調査や巡検の冊子作成、巡見先との交渉などの一連の活動を学生自身で行い、教員として求められる資質・能力を高めます。

2022 年度は、大潟村を巡検先とし、米づくりや干拓の歴史などについて学びました。右の写真は、大潟村にある「大潟富士」です。大潟富士は、日本一標高が低い山で、山頂の標高は、海拔 0m となっています。これは、大潟村が干拓地であり、本来であれば、海水面より下に位置することを意味しています。また、左の写真は、「大潟村干拓博物館」の写真です。この干拓博物館では、八郎潟干拓の経緯や大潟村の歴史に関する資料が保存されており、干拓作業の手順図や堤防の模型などを通し、大潟村への理解を深めることができました。また、現在に息づく大潟村の自然やジオパークにも触れ、大潟村の魅力を再発見することができました。



大潟村干拓博物館の展示

3 年次では、前期に「授業づくり演習」を履修し、2 年次での巡検をもとに、小学校班と中学校班に分かれて、授業づくりを行います。そして、附属小学校・中学校で授業をさせていただきます。2022 年度は、3 年生が洋上風力発電をテーマにした授業を実践しました。附属小学校・中学校に加え、県立高校でも授業を行い、多様な校種において教材化を図りました。

私たちも、来年度の授業づくり演習に向け、地域素材をどのように教材化するか、を考えていきたいと思っています。



大淵富士の様子

これまで培った学びや経験を糧にし、来年度も様々なことに挑戦してステップアップしていきたいと思います。



子どもキャンプボランティア

実習で得た学び

こども発達コース2年次 崎浜佳奈

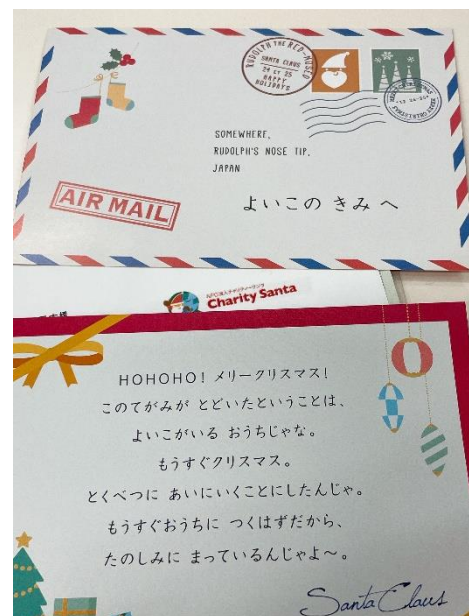
早いもので2年生も終わりに近づき、新しい春を迎えようとしています。2年生では実習やサークル、講座スタッフや留学生チューター等の国際交流も含め充実したキャンパスライフを送ることができました。今年度から対面授業も増え、学校で友達と会える喜びやでディスカッションをしたり実際に見たり聞いたりできる直接的な学びができたので学習意欲を維持することができました。

また、座学だけではなく介護等体験や教育福祉実習、付属小学校への実習もあり新たな視点や学びを獲得し、実践力を身に付けることができました。介護等体験では聴覚支援学校に行き、1人1人のニーズに合わせた授業や作業学習、自立学習という教科があり、職業に関する意欲やスキルを中心に学んだり生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識や技能を身に付ける学習等普通学校と異なるものがありました。子ども達の苦手な特性に応じてカリキュラムしてゆっくり克服、成長していき、自立できるように教師の手の込んだ支援体制に感銘を受けました。介護等体験では児童養護施設に行きました。子ども達の元気な姿が見られる一方、触れ合っていく中で子ども達の悲しい家庭背景や過去を知ると心が痛くなる場面もありました。

これらの実習では学校現場の中だけでは分からない外からの子ども達や教育、社会の実情を知る事ができたので教師になった際にも視野を広く持って教育をすることを大切にしていきたいと思いました。附属小実習では、学習生活指導1分1秒全てが学びとなりました。模擬授業では、独自の教材でオリジナリティを出し子ども達の学習意欲を高められたと思います。



よさとせ歌舞輝サークル



チャリティーサンタボランティア

第8回模擬授業フェスティバルを開催

2023年2月22日に、第8回模擬授業フェスティバルを開催しました。昨年度は感染症対策のため全面オンラインでの実施となりましたが、今回は対面で開催することができました。秋田県立大学からの3名3発表、国際教養大学からの2名1発表の参加を含め、学内外(!)から7グループ11名の授業者による模擬授業が演示されました(オープン参加の2グループを含む)。

模擬授業自体はわずか10分ですが、授業案作成や教材作成に多くの時間をかけてきたことがうかがえるものばかりでした。審査結果は僅差でした。表彰されたグループの皆さんから、感想をもらいましたのでご紹介します。

＜審査結果＞

最優秀賞(第1位)「Informal EngliSh」

優秀賞(第2位)「社国」

優良賞(第3位)「こはつチーム」



▼参加学生による感想

最優秀賞(第1位) Informal EngliSh

英語教育コース3年次 佐藤愛海

まずは、“第8回模擬授業フェスティバル”を開催して下さったことに感謝を申し上げます。

私が模擬授業フェスティバルの存在を知ったのは開催2か月前ほどでしたが、今年の夏に教員採用試験を控え、さらに他の試験にもいくつか挑戦しようと考えていたためエントリー締め切り日直前まで悩みに悩み参加を決意しました。きっかけは教授からの「入賞できれば教員採用試験の申し込みに書きますよ!」という一言でした。現時点での自身の授業力、人間性など教師としての資質・能力がどれほど培われているのか試したいと強く願っていたことを覚えています。当日まで準備期間が短い中、指導案の作成や模擬授業実践の練習などに取り組みしました。

当日は緊張していたためか、集合時刻よりも30分程早めに会場入りしてしまいましたが、私よりも早く来ていた参加者の方がいらっしゃったため少し緊張がほぐれました。その後続々と参加者らが来場し、いよいよ始まるのだと胸が高ぶっていました。私は7組中7番目で、他の参加者の模擬授業を見てからの実演でした。トップバッターで

ある国際教養大学のお二人の実演は、その場にいた誰もが引き込まれるような授業であり一瞬で憧れの存在となりました。私が目指す授業である、「生徒が目目を輝かせるような授業」のお手本のようなものでした。直前では模擬授業の内容を変更できなかったため、既存の指導計画の中でいかにしてその場にいる人々を自身の授業に引き込むか考えながら他のグループの実演を見ていました。どのグループも教科横断的な授業実践となっており、先生役の気配りや生徒からの意見の引き出し方、一つ一つのアクティビティのつながりなど詳細な部分まで意識された授業実践でした。私は緊張したり多少つまづいたりするだけですぐに周りが見えなくなってしまう傾向があるので、その場の状況に応じて臨機応変に対応していた姿を見て、私も見習わねばと痛感しました。

そして自身の番に回ってきたとき、とにかく楽しんで授業をしようと意気込んでいました。私の目標は、少しでも多くの生徒に英語を好きになってもらうことです。これを達成するために、生徒の表情や反応に気をつけながら授業を進めました。導入としてビンゴゲームを行い、ワークシートに記載された単語を用いて簡単なインタビューを合いビンゴを作っていくというものでした。会場全体を巻き込み、私に質問する生徒役の方もいたので、まるで実習のようでとても楽しい気持ちで授業ができました。さらに、教科書には載っていないような表現を教えたり、生徒に疑問を持たせるような質問を投げかけたりしながら授業を進め、生徒が退屈しないように心がけました。

結果発表を迎え“グランプリ”を受賞しましたが、この結果で満足するのではなく、さらに高みを目指せるように全力を尽くします。模擬授業フェスティバルは自信を試す場でもあると思うので、もし参加に迷っている学生がいましたら、失敗を恐れず、ぜひチャレンジしてみてくださいね!



優秀賞(第2位) 社国

教育実践コース3年次

松本直子・矢吹愛実・小林芽衣

今回の模擬授業を練る段階で、互いの専門教科である社会と国語の横断的授業をしたいと方向性は決めていました。秋田県民として意外と身近な「方言の話者の減少問題」は、私たちがもってい

る小学校6年生の実態像ではいささか難易度が高かったため、「①子どもたちが主体的に活動できる動機」と「②社会問題を考える活動までのステップ」をどのように作り上げていくかの話し合いが特に難航しました。時間をかけて考えた結果として、学習者の実態に合わせた展開から問題意識・学習意欲を引き出す手立ての工夫をすることができました。

実際の模擬授業では、前半部分の国語科と後半部分の社会科の接続となるところを実演しました。授業の内容としては、秋田弁(方言)が消えるかもしれないという危機感を子どもたちに持たせうえで、日本の危機言語の問題を取り上げながら、秋田弁(方言)の未来について考える活動です。教師のどのような問いかけが子どもたちにとっての疑問や関心に繋がるのかを考え、教師と子どもの掛け合いとなる授業を目指しました。実演では、子どもたちの発言を中心に授業を進め、板書のレイアウトや話し言葉を工夫して模擬授業を行うことを意識しました。本番は、普段とはまた違った雰囲気で行うことができ、回数を重ねることが大切だと改めて感じました。

これまで模擬授業は単なる練習だと思っていましたが、最近では「自分の課題に向き合い新しい授業にチャレンジする場」としての重要性を感じています。私たちは、学習指導要領や教科書において次の目標や指導法が掲げられていることを知っている一方で、実際自身がそうした授業に挑戦する機会はあまりありません。「これまでと何かを変えなくてはいけないけれどどんな授業をすればいいかわからない」、だからこそ失敗してもいい模擬授業は数少ない表現の場としての価値があると思いますし、そういう点で今回の教科横断型授業は、私たちにとって非常に有意義なものでした。来年度は4年生で残された時間もあまりありませんが、学生だからこそその強みを生かして今後も様々なことに挑戦していければと思います。



優良賞(第3位) こはっチーム

こども発達コース3年次 小林亜莉亜

他大学の学生や多くの先生方に見られながらの発表はとても緊張しましたが、深い学びを得ることができました。今回の模擬授業フェスティバルでは、「農業や工業」といった専門教科や教科横断的な学習など、私が大学生になる前には触れる機

会のなかった授業をみることができたので、良い経験となりました。今回演示した授業は私が実習で行ったものでしたが、子ども役をやってみたことで新たな視点から授業をみることができたと思います。

質疑応答やアンケートのコメントから、教師の一言で子どもが受け取る印象は変化するということを学びました。子どもとの対話の場面の何気ない言葉がけや、板書の仕方など、授業前に計画を立てておくことも必要であると考えました。また、子どもたちの思考を刺激し、児童が主体となる授業をつくるためには教材研究も欠かせないと感じました。「授業の専門家」である子どもたちが、自ら知識を獲得していくために必要な教師の支援のあり方を、これからより一層追究していきたいです。

こども発達コース3年次 久永小百合

模擬授業フェスティバルへの参加は非常に多くの刺激を受ける機会になりました。普段の大学の講義や実習の中で行う模擬授業は限定された条件のもと行うため、在籍する学校だけでなく取り扱う校種も教科も制限のない今回の模擬授業フェスティバルはまるで無差別級のボクシングの試合のようだなと感じました。それぞれの授業に優劣をつける様は自らの授業力を武器として他の参加者と戦うものであると参加前は捉えていました。

しかし、実際に授業を行いつつ、他の参加者の授業を見ていく中でこれは殴り合いではなく応援合戦ではないかと考えるようになりました。この日のために練りに練られた授業と堂々と教壇に立つ授業者の姿は同じ学生なのにも関わらず教師としての憧憬を抱かずにはいられませんでした。模擬授業フェスティバルにおける授業力は他者と戦う武器ではなく、学生たちに発破をかけ、自分をも奮い立たせるエールだと認識を改められました。

今回、様々な視点から自分たちの授業を評価されたことは貴重な経験になりました。この経験だけでなく、様々な工夫が凝らされた他の参加者の授業におけるワザも自分自身の財産にできるように今後も研鑽を積んでいきたいです。



第14回あきたの教師力高度化フォーラムを開催

2月17日金曜と18日土曜に表記のフォーラムを開催しました。2月17日午前「秋田県総合教育センターとの連携による発表」には126名が対面で参加し、2月18日土曜の午後の講演及びシンポジウムには、対面66名、Zoom参加38名の計104名が参加しました。17日午後と18日午前の教職大学院院生による研究成果発表には50名程度が参加しました。

1日目、2月17日（金）の午前中は、開会行事の後、秋田県総合教育センターとの連携による発表が行われました。最初に、教職発展演習受講者（学部生）が、ユニバーサルデザインや交流・共同学習などについての発表を行いました。それに対して、演習で指導にあたった総合教育センター研修員の方から講評を受けました。引き続いて、総合教育センター研修員の2名の方から、センターで取り組んで研究成果の発表が行われました。

主に学部3年次後期の学生を対象にして行われている教職発展演習の授業では、センター研修員の方が自身の経験を踏まえて、学級づくりや授業づくり、生徒指導などに関する指導を行っています。



NITS・秋田大学教職大学院コラボ研修
令和の日本型学校教育の構築
「発達障害の今」－新たな支援の展開に向けて－

第14回

あきたの 教師力 高度化 フォーラム

期 日
令和5年 **2月17日(金)・18日(土)**

会 場
秋田大学60周年記念ホール
教育文化学部3号館145教室 他

対 象
全国の教職員・研究者・教育委員会指導主事・
研修員・教員志望学生・院生等

日 程

1日目 2月17日(金)
9:00 開場・受付(秋田大学60周年記念ホール前)
9:30 開会行事
9:50 秋田県総合教育センターとの連携による発表・ 教職発展演習受講者(学部生)の発表・ 秋田県総合教育センター研修員の発表
11:40 昼食・休憩
13:00 研究成果発表会Ⅰ(学部卒業生)
2日目 2月18日(土)
10:00 研究成果発表会Ⅱ(教職大学院生)
11:40 昼食・休憩
12:45 講演 「発達障害とその周辺－医療の現場から－」 渡部 泰弘
14:05 シンポジウム 令和の日本型学校教育の構築 「発達障害の今」－新たな支援の展開に向けて－ シンポジスト 秋田大学教育文化学部 鈴木 徹 秋田県教育庁特別支援課 渡邊 真由美 秋田県立医療療育センター 小児科・メンタルヘルス外来 工藤 智史 秋田県立医療療育センター 小児科・メンタルヘルス外来 渡部 泰弘 秋田大学教育文化学部 武田 篤
15:40 閉会

※新型コロナウイルス感染症の状況により、計画を変更する可能性があります。
変更がある場合には、本学教育文化学部HP(<https://www.akita-u.ac.jp/edhuman/>)に記載します。 **【申込方法】**※要をにご覧ください

【主催】秋田大学教職大学院
【共催】秋田大学教育文化学部附属教職高度化センター／
秋田大学教職課程「キャリア支援センター」
【後援】秋田県教育委員会／秋田市教育委員会

秋田大学教育文化学部総務担当
〒010-8502 秋田市手形学園町1-1
☎010-850-2509
kyosou@jimu.akita-u.ac.jp

2日目、2月18日（土）の午後は、まず、渡部泰弘氏（秋田県立医療療育センター小児科・メンタルヘルス外来）による講演「発達障害とその周辺－医療の現場から－」が行われました。その後、シンポジウム「令和の日本型学校教育の構築「発達障害の今」－新たな支援の構築の展開に向けて－」が、シンポジスト、渡邊真由美氏（秋田大学医学部附属病院臨床心理士）、鈴木徹氏（秋田大学教育文化学部准教授）、工藤智史氏（秋田県教育庁特別支援教育課指導主事）の3氏に、コメンテーターの渡部泰弘氏、コーディネーターの武田篤氏（秋田大学教育文化学部教授）を加えて行われました。





シンポジウム、閉会行事の終了後、教職大学院を本年度で去られる武田篤教授、林信太郎特別教授、栗林守特別教授に院生から花束が贈られ、退任の挨拶がありました。また、教職大学院の今年度の修了生に対しても、在学生から記念品と花が贈られました。



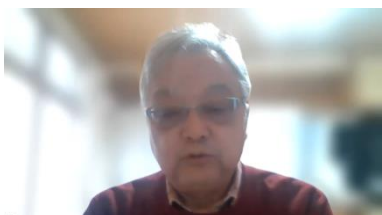
附属学校学部共同委員会 総会及び研修会を開催

2月15日水曜日 15:00～16:45 に、附属学校学部共同委員会の総会及び研修会が Zoom により開催されました。当日の参加者数は 129 名（学部教員 48 名、附属教員 81 名）でした。

最初に、福島大学名誉教授の大宮勇雄先生より、「広い世界を生きる子どもを育む」と題した講演が、1 時間 20 分行われました。幼児教育における政策、施策の問題点を踏まえた上で、実践事例をもとにしながら、学力とは、学ぶ力とは何なのか、そして教育者はどのようにそれを支えるのかを語られました。

・学力とは学ぶ力であり、学ぶとはよりよく成長すること、生きる力であること、学びの構え、学ぶに対する向き合い方が重要であり、好奇心、粘り強さ、コミュニケーションが大事になる。「自ら進んで」というところに価値があり、すべての生活に意味がある。①関心をもつ、②熱中する、③困難に自ら根気強く立ち向かう、④コミュニケーションする、⑤相手の立場に立って行動しようとする、ことが求められる。

・学ぶ意欲とは、①難しいことに自分から立ち向かい、あきらめずに何度もやってみること、②その子にとってむ



ずかしいことに挑戦するのであって、難しさは比較できるものではないこと、

③できる、できないの結果では測れず、その子の視点に立ってプロセスを見て初めて学ぶ意欲が見えてくること

・学ぶ意欲は性格ではなく、形作られるもので、結果志向の子どもは小さな失敗をした子を激しく非難し、失敗は悪いことだととらえるのに対して、学び志向の子どもは一緒に考え、失敗は学びの始まりととらえること

・結果で評価する大人がいると学ぶ意欲は育たず、その子の視点に立って一緒に考える大人や仲間がいると育つこと、学ぶ意欲は個人内部の力ではなく、子どもと周囲の環境との相互作用の中で動くこと

・教育者は子どもの関心や熱中を一回の記録ではなく、長く継続してとらえること、記録よりも解釈を大事にして、振り返って読み返すことが重要であること、ただ一つの正解ではなく、一人の視点より複数の視点で、子どもの見方を豊かにするための話し合いをすることが重要。



広い世界を生きる子どもを育む
—「架け橋プログラム」と幼児教育の未来—

2023年2月15日

大宮勇雄（福島大学名誉教授）

令和4年度「秋田大学における障害者の生涯学習モデル講座」の実施報告

こども発達・特別支援講座 前原和明

	日時	テーマ	講師	場所
1	2022年9月3日(土)	オリエンテーション ／Zoomの使い方	前原和明先生	オンライン
2	2022年9月10日(土)	気象・気候・雪氷	本谷研先生	オンライン
3	2022年10月1日(土)	絵・美術	長瀬達也先生	対面
4	2022年10月22日(土)	情報セキュリティ	林良雄先生	オンライン
5	2022年10月29日(土)	家計管理・金銭管理	堀江さおり先生	オンライン
6	2022年11月26日(土)	主権者教育	加納隆徳先生	対面

令和2年度より、特別支援教育研究室では、秋田県生涯学習課からの要請を受けて「障害者の生涯学習支援モデル事業」に取り組んでいます。令和4年度も、大学における生涯学習講座の講義内容や障害特性に配慮した実施方法などを検討するための試行的取組みを行いました。特に、今年度は試行的に、60分・1回の「講義」及び「ゼミ」を計15回(計30回)実施しました。講義は土曜日の10時～11時、ゼミは水曜日の18時～19時と、実施曜日及び時間帯を固定し、年間を通じて対面あるいはオンラインで実施してきました。

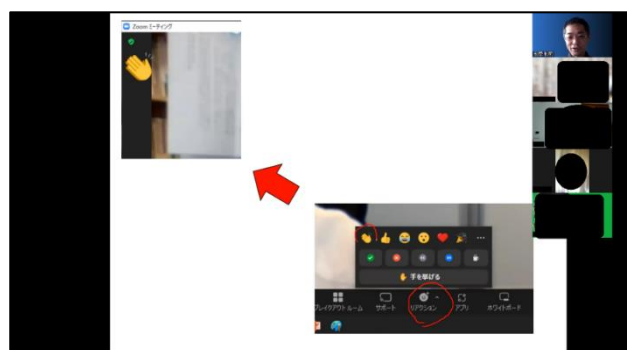
「講義」では、特別支援教育研究室教員による「みんなが協力して住みよい社会をつくるために」、「こんなときどうする?」、「みんながハッピーになるための心理学」、「ストレスとサポート」などの講義に加えて、「ゼミ」の中での参加者のニーズに基づき公開講座を計画し実施しました。この公開講座は、「講義」の1回分として行いましたが、広く参加者を募集する形で行っています。計6回の公開講座は、以下のテーマで行い、教育文化学部の先生方にご協力を頂きました。

公開講座の内容は、受講者にとって身近なテーマであったようで、提出いただいた感想には、「生活場面に役立てていきたい」や「実際に取組んでみたい」といったようなものがありました。障害のある方々にとって、このような学びに特化した場は大変少なく、学びを得るための貴重な機会を提供できたと自負しております。

今年度の生涯学習では、定期的に大学に通うことを前提として実施しました。これにより、参加者個人の性格や状況もよくわかり、参加者のニーズに応じた講義内容の設定、「ゼミ」におけるコミ

ュニケーションの充実が図れました。一方で、「仕事が忙しく、継続的に参加することが難しい」などの理由から、最終的にすべての内容に参加できた方は2名にとどまったことが課題です。公開講座については、計6名の参加者があり、次年度の開催を心待ちしている旨の連絡もいただいています。参加者の増加に向けたプログラム周知の方法の工夫、プログラム内容(回数及び講義テーマなど)の検討は継続的な検討課題として考えています。

今年度の実施状況を踏まえて、次年度(令和5年度)も生涯学習講座の実施を計画しています。工夫の一つとして秋田県生涯学習センターの「あきたスマートカレッジ」との連携を模索しています。引き続きの試行実施を通じて、大学における障害者を対象とした生涯学習の在り方を検討していきたいと考えております。



オンライン講座「Zoomの使い方」の様子



対面講義「絵・美術」における受講生の様子

2023 年 3 月で退任される先生方からのメッセージ

学生を育ててくれた「特研」

教職実践専攻教授 武田 篤

本学部の特別支援学校教員養成コースに 22 年間所属しました。この間、たくさんの学生の皆さんが県内外の教員として巣立って行きました。振り返ってみると入学時から特別支援学校の教員をめざしている学生は限られており、多くは大学 4 年間の学び中で、その道を選んでいったように思います。学生の進路選択に大きな影響を与えたのは大学での「専門的な」学びと言いたいところですが、本当は違うところにあるように思います。学生たちに最も大きな影響を与えたのは、間違いなく「特研（トッケン）」と学生たちが名づけた、研究室での学年を超えた交流とその伝統だと思います。

本学部に初めて養護学校（現在の特別支援学校）の教員養成課程が設置されたのが、昭和 43 年（1968 年）ですから、それから半世紀以上に渡って、「特研」の伝統や行事が脈々と引き継がれてきました。学生の皆さんは、入学とともに「1-4 コンパ」「1-3 コンパ」「1-2 コンパ」と 3 日連続で上級生からの熱烈な歓迎を受け、その後の 1 年生主催の「観桜会」でのお返しコンパにより、先輩後輩の絆が強くなるのでした。大学の強歩大会では、通常は寒風山から大学までの片道を歩くのですが、なぜか「特研」の学生は寒風山までを往復するのが伝統となっていました。さらに、駅伝大会や、「特研」初代教授の冠がついた中村杯というバレーボール大会と、学生たちは運動部に対抗できる位の体力作りに励むのでした。

もちろん「特研」では、教養や文化も忘れません。毎年 9 月には、全学年あけて県内各地に泊まりがけで出かけて学び合う「巡研」、また、大学祭ではおそろいのハッピーを着て「特研」名物の団子売りで資金を稼ぎ、年末には各学年で脚本や演出に工夫を凝らした演芸祭で盛り上がるのでした。さらに毎年、学生による「特研」の情報誌である「機関誌 Q」が発行され、今年は、記念すべき第 50 号を数えました。

そしてもうひとつ、「特研」の伝統で忘れてならないものに、障害のある人たちへの余暇支援を中心とした様々なボランティア活動があります。ここでも、学年を超えて先輩から後輩へとボランティア活動が代々引き継がれてきました。大学に入学したてで、右も左もわからず不安だらけの学生が、先輩たちに背を押されボランティア活動に足を踏み入れたとたん、ボランティアのとりこになっていく姿を毎年みてきました。学生が、なぜあ

んなにボランティアに「ハマル」のかずうっと不思議でした。でも、最近ようやくその一端が見えてきました。そのキーワードは「自己有用感」。ボランティアに参加した学生は、自分がそれほどたいしたことをしているわけではないものの、活動の終わり頃には参加した子どもや青年たちから「今日は、楽しかった！」「また今度、一緒にやろうね！」などと、何事にも代えがたい「ご褒美」をもらうことになります。何もできないと思っていた自分が、「誰かに必要とされ」、「誰かの役に立つ」ことができることを実感し、人間として最も大切なものを手に入れることができるのです。

最後になりますが、大学で学び、人として育ち、成長するのに大切なことは、もちろんどのような師に出会えるかということもあるかもしれませんが、その研究室がどのような伝統を持ち、どのような仲間がいたかにかかっていると思います。この「特研」を巣立っていた卒業生の皆さんを育ててくれたのは、まさしく伝統の中に集った仲間たちとの出会いと 4 年間の泣き笑いの日々だったのだと、つくづく思うのです。この「特研」の伝統の 1 ページに参加できたことを幸せに思います。22 年間ありがとうございました。そして、次の世代へバトンタッチです。

「縁（えん）」が「円」のように

教職実践専攻特別教授 栗林 守

かつて自分が、内地留学や現職教員院生（修士課程）でお世話になった本学に、30 年近くの時を経て今度は教員としてまたお世話になるとは、全く思いもよらぬことでした。予期せぬ出来事であり、また何かしらの不思議な縁というものに、改めて思いを巡らす機会となりました。

しばらくの時を経て本学にやって来てみると、そこには現職教員時代にお世話になった方々がたくさんいらっしやって、懐かしく心強く感じるとともに、やはりここでも縁というものを感じざるを得ないものでした。実際仕事を進めるに当たっても良き相談相手になっていただいたし、ご指導をいただきまして嬉しく思いました。

また、ここに来て初めてお目にかかる先生方に助けていただいたり、専門的な見地から親切にご指導いただいたりしたことにも、心より感謝申し上げます。

現職教員院生の皆さんを眺めると、授業での事前の課題があり、発表があり、リフレクションがあるということで、以前よりも忙しそうで少し気

の毒な気がしました。しかし、いずれも力のある人たちばかりですから、確実に課題をこなして自分の力として蓄えている様子を見て、常々感心していました。また、ストマスや学部生の皆さんの様子を見ても、我々の時代よりも遙かに真面目で真剣な態度にびっくりすることが多くて、これまた秋田の教育力の頼もしさを実感しました。この後、どこかでお目にかかる素敵な縁を楽しみにしています。「縁」が「円」のようにまあるくつながりますように。

3年間の勤務でしたが、たくさんの皆さんのお世話になりました。ありがとうございました。

大変お世話になりました

英語教育コース講師 平良 一史

令和2年4月1日に着任し、3年間という短い間ではありましたが、皆様には大変お世話になりました。秋田に来るのは初めてで、大学で正規として働くのも初めてでしたので、全てが新鮮でありました。郷里は沖縄で、大学卒業まで沖縄で過ごし、その後はハワイ大学の大学院に進学しましたので、着任前までは人生のほぼ全て南国で過ごしておりました。寒冷地秋田に住むことが決まった際は環境に順応できるかどうか不安で、案の定思いもよらない出来事が起こり、その都度対処法を身につけながら秋田の生活に慣れてきました。また、今までに体験したことなかった冬の到来を伝えてくれる紅葉の秋、凍てつく地面、降り積もる雪、寒さの中に時折顔を出す太陽、冬を耐え忍んだ後に訪れる春などはとても新鮮で、感覚の幅が広がり、風土と文化と人を考える実りある体験となりました。

新型コロナウイルス感染症が社会や大学に影響を与え始めているなか働くこととなり、従来の大学教育や業務がどのようなものかわからないまま仕事を必死に身につけていた覚えがあります。大学教員として学生と対面で接する経験のない状態で遠隔授業に突入し、学生の顔が見えない、肌感覚がわからないまま授業で教えておりました。新型コロナウイルス感染症の実体解明の進展やワクチン接種の普及などに伴い規制が緩やかになるにつれ、対面授業を実施する回数が増えました。画面に映る学生を相手に話している際には機能しない感覚を活用することができるようになり、個々の学生の特徴を感じながら授業を行うことができ、遠隔授業では味わえない繋がりを感じることができました。

専門として「異文化理解」科目を担当しながら、学生が自文化・他文化に気づき、興味・関心を持てるよう授業を構成しておりました。令和4年度後

期には留学生が履修するようになり、授業では文化への意識を促すことができるようなトピックを考えながら他の文化背景を持つ学生とディスカッションをする機会を設けることができました。約12年間のハワイ留学中、私は他の文化を持つ様々な人々と接することができました。他文化との接触を通じて自文化・他文化への興味・関心が湧き、文化の学びへの動機となり、探究し続けております。学生にも少しでも他文化と接する機会を設けて彼ら彼女らが文化への興味・関心を高めていけるよう日々考えておりましたので、留学生のいる授業は学生にとって刺激になったのではないかと思います。

英語教育コースの一員として授業・研究・業務を遂行しながら少しでも秋田大学教育文化学部に貢献できていれば幸いです。皆様には大変お世話になりました。ありがとうございました。



秋田大学での8年間の思い出

こども発達コース准教授 鈴木 翔

私は平成27年4月に、まだ理工学部改組される前の工学資源学部の教職担当として秋田大学に着任いたしました。そこで5年間、その後、教育文化学部に移り、3年間お世話になりました。

理工学部では、教職に関する科目を網羅的に担当しており、教育実習の巡回やサポートなども担当しました。教育を主たる専門としない彼らの授業は、斬新な発想に溢れており、もし彼らのような学生が教職を目指してくれれば、数学や理科の楽しさや有用性を伝えられるのではないかと思います。ここでの私のサポートが上手にできていたかどうかはわかりませんが、そのとき関わった数人の学生が現在も教壇に立っていることをたいへん嬉しく思います。

教育文化学部に着任したあとは、校種間をまたいだり、つないだりすることに関わる授業を多く受け持ちました。また、理工学部所属時とは違い、

講座やコースに所属することになったため、コース主任や担任など、コースや講座運営に関わる業務も経験しました。ここでも教員の皆様や、学生たちに恵まれ、多くのことを学ぶ機会をいただきました。とくに卒論指導では、毎週学生たちが頑張っている様子を見て、勇気づけられることもよくありましたし、大学生の方々が考えていることや流行？にも少し詳しくなれた気がします。批判的思考が得意な学生もあり、研究のヒントをもらうこともありました。幼児教育にかかわることができたのも、貴重な経験でした。

私が教育文化学部 にいた 3 年間は、新型コロナウイルスの影響でさまざまなイベントが中止されたり、対面での授業が制限されたりした時期でした。もちろん、この期間だからこそ、できた経験も様々あるのですが、「普通の」教育文化学部の 1 年間がどのようなものなのかを知らないまま、秋田大学をあとにするのが名残惜しいです。

ここで学んだことを糧にして、これからも研究、教育に頑張っていこうと思っておりますし、今後お会いする機会もあると思いますので、引き続きどうかよろしくお願いいたします。

＊他に、山崎義光准教授（教育実践講座）、林信太郎特別教授（教職実践専攻）が退職されます。

みなさまの学部・研究科への貢献に感謝し、これからのご健勝を祈念いたします。



学部・研究科の活動（2023 年 1 月～2 月）

【全学】

1/14・15：共通テスト
1/20：学校推薦型入試
2/20：研究不正防止 F D
2/25：前期日程

【学部】

1/27：教師力向上協議会、教育研究カウンスル・運営カウンスル
2/20：第 3 回地域連携セミナー
2/21：模擬授業フェスティバル

【教育学研究科】

1/17：教職実践専攻 6 年一貫プログラム選考面接
2/11：教職大学院学校マネジメントコース修了生
発表・交流会
2/17・18：教師力高度化フォーラム

【附属学校園】

2/15：令和 4 年度秋田大学教育文化学部附属学校
学部共同委員会総会及び研修会

発行 秋田大学教育文化学部／教育学研究科

〒010-8502 秋田県秋田市手形学園町 1-1 TEL 018-889-2509 FAX 018-833-3049

教育文化学部・教育学研究科 H P <http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/>

学部研究科通信「みなおと」バックナンバー⇒http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/guide/gu_magazin.html

教職大学院通信「暁鐘の音（かねのね）」⇒http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/graduate/graduate_magazin.html

＊誌名「みなおと」の由来である秋田県女子師範学校校歌（1910 年制作）を聴くことができます。

http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/guide/gu_symbol.html をご覧下さい。